

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



「冠文堂書店」が事務局として絵本を読み聞かせる（宮城県仙台市宮城野区／詳しくは5頁へ）

特集 地元のお店だから できること

- 花をとおして、地域のつながりをあと押し
買いもの支援や見守りも
おいかわ生花（宮城県登米市） 3
- 本を囲み、子どもやその親たちがふれあう
冠文堂書店（宮城県仙台市宮城野区） 5
- 訪問型営業がお客を見守り
共栄クリーニング店クリーニングのいーちゃん（宮城県石巻市） 7

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
（皇學館大学 現代日本社会学部 准教授 大井智香子さん）

- まじわる災害公営住宅 9
茂庭第2市営住宅めぶき町内会（宮城県仙台市太白区）
- インタビューあの人に会いたい 10
早坂武年さん（宮城県仙台市青葉区）
- 東北の元気 11
アマチュア・マジシャンズ・クラブ大船渡（岩手県大船渡市）
- 住民が支え合う生活支援 12
粒江地区社会福祉協議会（岡山県倉敷市）
- どこでもサロン 13
畑が男の集いの場（福島県福島市）
- 風害・糸魚川市駅北大火からの歩み 後編 14
新潟県糸魚川市
- 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ 15
- 東北の元気 16
ボランティアグループ「やさしい畑」（宮城県大崎市）

・購読者を募集しています！ ・次号予告 ・お知らせ

地元のお店だからできること



お店がしていること、

お店で起きていることをよく見てみると、

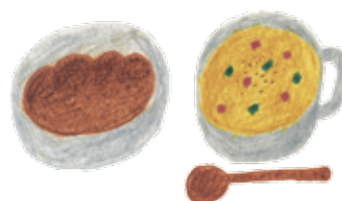
商品の売り買いや、

有料サービスの提供・享受のほかにも

価値の大きなものがたくさんあります。

商いを軸としながらも、お店の利益ばかりでなく、

地域の人や利用する人の生活に目を向ける。



そして、かかわる人たちが暮らしやすくなるように気を配り、

困りごとを解消したり、応援してくれたりしています。

地域でその人らしく、いきいきと暮らすため、

お店がゆるやかに住民を支え、

住民の人生に寄り添うこともあるようです。



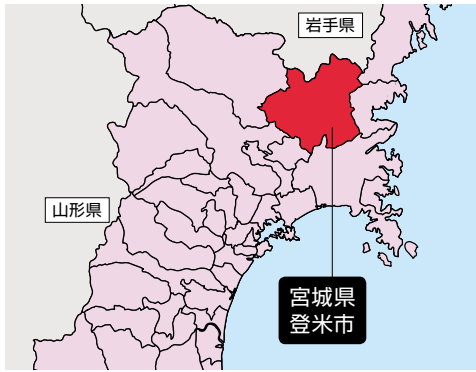
「お店」も「お客」も、それぞれが地域の一員。

そう考えれば、今回の特集でご紹介する

3つのお店のような支え合いの担い手が、

あなたの周りにも、よりたくさん見えてきます。





電話一本で駆けつけ、よるこばれている送迎サービス。運転しているのは店主の奥さんの里美さん

DATA

おいかわ生花

〒987-0511

宮城県登米市迫町佐沼字西佐沼27

TEL: 0220-22-3123

営業時間: 午前9時~午後7時

商品購入時にレジで「地域支え合い情報を見ました」と伝えると、ささやかな一品をプレゼント。

<有効期限 / 2019年2月20日まで>

花をとおして、地域のつながりをあと押し 買いもの支援や見守りも

◎おいかわ生花（宮城県登米市）

ポイント

- 人と人とのつながりを、花を通じてあと押し！
- カウンターがささやかなお茶飲みの場にも
- 買いもの困難者のために無料送迎。お客さんへの感謝と心配の気持ちから、自然に見守り訪問も行う

宮城県登米市は迫川のほとり。かつて役場があり、中心市街地として一際にぎわった「登米市佐沼大通り商店街」で、80年以上3代に渡って続くのが「おいかわ

地域に根差して80余年

ね」って言ったあとに、連れてきた時には(彼の)よいところを教えてあげました。そうしたら結ばれたんです」と笑顔で話すのは、店員の及川良子さん(85歳)だ。

お花屋さんがサロン!?

お店は店主の及川繁さんとその奥さんの里美さん、繁さんの母親の良子さん(先代店主の奥さん)の家族3人で仲良く切り盛りしている。順番待ちのお客さ

——花を通じて何組も縁をとりもってきた。若い男性のお客さんが多く訪れ、恋愛の指南もしてくれるお花屋さんがあるという。

「デートの日にあわせて赤いバラを送ると良いよ、と助言したんです。女性はやっぱりバラが一番。本数とか量じゃないのよ、あまり大きい花束をもらってもね、などと伝えて。花束をつくって、食事する場所なんかも教えて。『いい人でしょうね』

生花」だ。黄色を基調とした明るく華やかな外観が目を引く。扱うのは生花、シルクフラワー、ブリザーブドフラワー、花の商品券。お店には、仙台市中央卸売市場の競り日に厳選した新鮮な花を出している。人生の節目に、お供えものに、インテリアに。「お花を買うならおいかわ生花さんと決めて

いる」という数十年來のお得意さんが多くいて、長年地域に親しまれてきた。さらに、「安くて、品物が良くて長持ちする」と口コミで広がる、仙台市や南三陸町、石巻市といった県内他市町村や遠くは東京からも注文が入るなど、着実にファンを増やしている。



おいかわ生花

「地域の皆さんに愛される店に」

んには、カウンターでお茶を出して良子さんが接客。はじめて来店した人には「どちらからですか」と声をかけ、体調が悪そうなお得意さんには、「あれ、どこか調子悪いんじゃないですか」と健康面を気遣う。「気持ちよく過ごしていただいで、ここに来て良かったと思ってもらえば、次にもつながら」とお客さんとの楽しい会話を大事にしている。そのなかで、親しくなったお客さんに、プロポーズ用の花束の相談に乗ったりもする。もちろん、急いでいる人や一人でじっくり花を見たいような人は、雰囲気察して、無理に話しかけることはしない。

買いもの支援と見守りにも

お店は商品の配達・配送のほか、高齢で移動手段をもたない人などには、送り迎えも無料で行っている。近所の人に送ってもらっ



はじめて来たお客さんとも…

て来店した場合にも、頼まれて運転した人にも、お店からお礼の品をこっそりプレゼントしている。そこには、お店側の「頼んだ本人もお礼をするだろうけれど、店自体がすればよろこんでまた送迎をしてくれるから」という心遣いがある。

長年通うお客さんの姿がしばらく見えない時には、繁さんたちは心配してその人の家を訪ねていく。そうすると、体調を崩して寝たきりになった住民さんから涙を流して感謝されたこともあった。「やっぱり長いおつきあいですから、感謝の気持ち」と良子さんは特別なことをしたわけではないと



すぐに仲良しに！握手を交わす及川良子さん

いう。「ご機嫌どう？」と訪ねるくらいですが、私も歳を重ねてやさしい声をかけられるとうれしいものですから」と相手の心中を慮る。

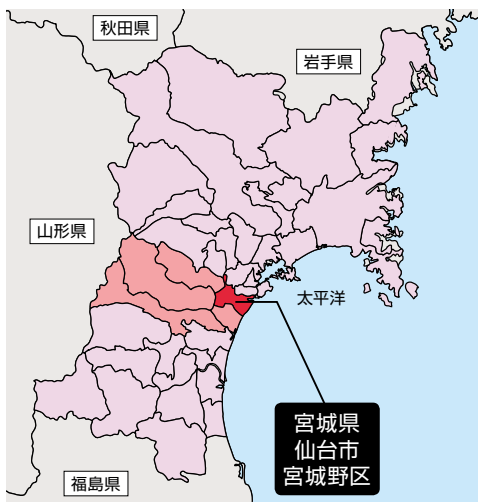
ときに、営業時間外の夜でも飲み屋などから急ぎの注文が入れば、配達にかけつける。新築記念であれば、実際にその家を訪ねて、壁紙の色やサイズから似合う花の検討をつけるなど、子細な要望にも応えている。そうした誠意と真心を込めた対応を続けているのも、日頃からの感謝の思いと「労力は奉仕」というお店の信念があるからだろう。

「小売店だと、お花を扱う用事がないと入りづらいかもかもしれませんが、

気軽に入っていたきたいですね」と話す店主の繁さんは、店舗の写真や基本情報をWeb上で表示する「Googleマイビジネス」でPRしたり、地域情報サービス「Yahoo!ロコ」を活用したりと、伝統を大事にしながら時流にも乗っている。

店内には、「華道家元池坊生花投入盛花教授」の看板がある。これは繁さんが生け花の指導資格をもつ証だ。月に一回、町内の集会所で、町内会婦人部に無料で生け花を教えている繁さん。教室では合間に参加者同士でお茶飲みもしている、地域交流の場にもなっている。

「やっぱり心と心が通わないとつながりませんよ。それが一番」と良子さんは話す。長年この地域で住民を結び、買いもの支援や見守りにも派生する「おいかわ生花」。その目配り・気配りの実践は、地域支え合いの体制づくりや生活支援体制整備事業とも地続きにあるといえそうだ。



大人も子どもと楽しめる紙芝居

DATA

冠文堂書店

〒983-0023
宮城県仙台市宮城野区福田町1丁目7-29
TEL/FAX 022-258-3502
※駐車スペースは1台分

本を囲み、子どもやその親たちがふれあう

◎冠文堂書店(宮城県仙台市宮城野区)

ポイント

- 本を通じて、「社会教育」や「子育て支援」など、さまざまな捉え方のできる活動が地域住民をつなぐ
- 店舗を構える書店だからこそ保てる、住民とのつながりもある

読書と交流を促進

本離れが進み、個人で営業していた書店も以前より減っているなか、仙台市宮城野区の福田町にある「冠文堂書店」は、開店から49年を迎えた。店舗は、店主の自宅の1階部分に構えられている。子ども向けの絵本から大人向けの小説、雑誌などを販売し、児童館などの施設からの注文に応じた配達なども行っている。そして、その2階では20年前から月1回、子どもやその親を対象に、本の読み聞かせなどを行う「お話し会」が開催されている。

毎月第4土曜日の午前10時30分から12時頃まで開かれる、お話し会。会場となる一室には絵本などが飾られている。主催は、ボランティアグループの「おはなしポッケ」だ。冠文堂の読書アドバイザー、小野しづ子さんが事務局を務めている。

近頃よく参加するのは、乳幼児とその母親で、町内からベビーカーを押し

て歩いてくる人もいれば、町外から車で来る人もいる。参加者がそろると、「始まるよ」始まるよ」おはなしポッケ、始まるよ」と、手拍子とともに、お決まりの軽快な歌で会が始まる。童謡を歌い、絵本を読み聞かせ、紙芝居を披露し、手遊びをし、折り紙を教える一緒に作品づくりをするなど、さまざまな内容を設け、手袋人形の会話の内容から絵本の話へ導入するなど、工夫をこらして参加者を楽しませる。ときどき昔語りの語り手を招いて話をしてもらったり、夏には伝統的な仙台七夕飾りを皆でつくって食事をしたり、12月にもクリスマスに合わせた企画を予定している。

乳幼児が読み聞かせ中に別のものに興味を示したりもするが、そうかと思えば紙芝居にき付けになっていたりする。小学生と異なり、絵本などの内容を十分に理解することは難しそうだが、絵を眺めたり、話し手の声を聴いてうれしそうに過



冠文堂書店

店主 小野忠敏さん、小野しづ子さん

おはなしポッケ 佐藤次子さん(左)

「子どもたちは本が好きで、大人がどういう環境をつくってあげられるかがポイント」(小野しづ子さん)

です。最後のおよそ30分間は、皆でテーブルを囲んでお茶会をし、大人同士が談笑したり、子ども同士で遊ぶ。

乳幼児を連れて参加した親からは「近所の公園では、小学生が年齢の近い子ども同士で遊ぶので、うちの子は蚊帳の外。ここのなら、年齢の近いお兄さん、お姉さんと一緒に遊んでもらえて、刺激にもなる」「大人にとっても、子育てなどに関する情報交換のいい機会になっている」といった声が聞かれる。転勤で新たにこの地域に住むようになった人も来ることもあり、会を通じて近隣の人と交流するきっかけになる。

地元の書店ならではの

おはなしポッケは、多くの人に絵本と親しんでもらおうという小野さんの思いから、夫で冠文堂店主の忠敏さんや地域のひとと一緒に始めたもので、現在は3人で活動している。毎月、メンバーの佐藤次子さんと、事前に打ち合わせ



店内にはピアノやギターも

をして、季節に合わせた絵本を選んだり、会のなかのプログラムを検討して、本番を存分に楽しんでもらえるよう準備する。

「私たち自身、絵本が好きだし、自分たちが楽しんでいけるから、長く続けてこられた」と2人は声を揃える。子どもたちの目の前で絵本を開き、生の声で空気や風合いを伝えることで、反応が見られ、伝えていけるよるこびを実感できるのだという。「次もよろこんでもらおう」「この本を読んだらどう思うかな」などとやりがいも大きい。そんな思いのこもった取り組みを通じて、親が子どもの好みを理解し、気に入った本を買って自宅で読んであげるな

ど、親子間のコミュニケーションの手伝いにもつながっている。

5年ほど前までは、お話し会のたびに近所の小学生が部屋いっぱい集まり、紙芝居などを楽しんでいた。障がいのある人がいても、分け隔てなくふれあいながら和やかに過ごす。

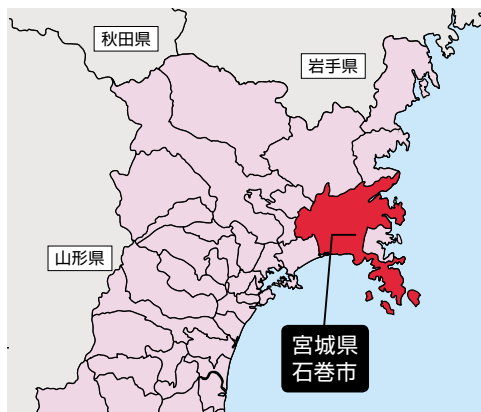
また、なかには「読み聞かせをしてみたい」と言った小学生がいて、小野さんたちが一緒に練習をしてあげて、ほかの子どもたちに披露したこともあった。その小学生も、やがて高校へ進学して放送部員として活躍したり、大学を卒業して一般企業に就職。近所で育った人たちのそんな成長の過程も、小野さんの耳に入る。おはなしポッケと楽しい時間を共有した、かつての子どもが、店へ挨拶に立ち寄りたり、本を買うついでに話をしていくこともある。お話し会などが、自身の特別な思い出であり、成長の支えとなっていることが実感されているのだろう。

冠文堂の店主を務め、

会の冒頭でオカリナの音色を聞かせてくれる「オカリナおじさん」こと、忠敏さん。30歳のころ、勤めていた銀行を退職して、以前から憧れていたという書店を開いた。オリジナルの広報紙を作成し、お勧めの本や書店を訪れてくれた子どもたちの写真、小野さん夫妻のそれぞれのコラムなどを掲載、発信してきた。また、店舗でミニコンサートを開くなど、地域の人が集まり、交流する場としての役割を書店にもたせてきた。2人の息子も楽器を演奏したりして、盛り上げるのに一役買ったこともある。

忠敏さんは病気を患い、以前に比べて身体の自由が利かなくなってしまうが、ご近所や知り合いからも「店は辞めないで」の声。「開店から50年経つまでは続けることが目標」と忠敏さん。しづ子さんも、「おはなし会にまた小学生にも来てもらいたいし、元気なうちは継続したい」と語る。書店がもつ、地域での働きと可能性に今後期待したい。

清



個人宅などを訪問して衣類などを集配

DATA

共栄クリーニング店
クリーニングのいーちゃん

〒986-0814
宮城県石巻市南中里1丁目3-9-307
TEL 0225-22-6155

訪問型営業がお客を見守り

◎共栄クリーニング店クリーニングのいーちゃん（宮城県石巻市）

ポイント

- スタッフが個人宅などへクリーニング品の集配に伺うことで、住民の移動や運搬の不安・負担を解消
- 集配や営業としての訪問が、ご用聞きやゆるやかな見守りにも

宮城県石巻市の「共栄クリーニング店クリーニングのいーちゃん」は、クリーニングが必要になった衣類や布団、カーテン・カーペットなどのインテリア用品を、お客のもとへ直接受け取りに伺い、クリーニング後に再び訪問して届けるスタイルがよるこばれている。朝・昼・夕、平日・休日、相手の都合に合わせて集配するため、近所にクリーニング店がなかったり、店まで荷物を運ぶことが難しい人にとって

よるこばれる営業訪問

は特にありがたい。
愛称が社名にもなっている、代表の大竹伊平さんは、集配のほかにも、お客とのつながりを保ったり、新規獲得のために、営業として、同市内外を日々訪問して回っている。「最近、調子はどうですか」「何かクリーニングするものはありますか」。はじめての訪問は警戒されても、何度か会話を重ねるうちに、親身になってくれるという。

お客の家で、10〜30分間ほどお茶飲みをしていくことも多い。そういった訪問

先は高齢者がほとんどで、日中独居の人も少なくない。ひとりですごして暗い気持ちにならないよう、時間の許す限り会話をしていたいと考えている。また、しばらく顔を出さないとお客から「最近来ないね」と言われることもあるくらいだ。

「預かって、クリーニングして、届けてなんぼ」と真剣に仕事に向き合うが、「仕事としてだけのつきあいじゃつまらない。人と人との気持ちのつながりが大事」と目を輝かせる。

若い頃から家業のクリーニング屋を手伝い、大竹さんが営業スタッフとして地域に出るようになったのは20歳の頃。松島町、現南三陸町の志津川地域、現石巻市の牡鹿半島や雄勝地域といった沿岸部も訪問していた。当時は、それらの地域から離れた高校への進学に伴い、地元を離れて下宿する人も多かったため、実家から下宿生への送迎を「ついでだから」と大竹さんが無償で届けることもよくあった。お客も、次回訪問時に「こないだは助かったから、ご飯食べていって」と、海の

幸をごちそうしてくれ
ることもあり、相互の思
やりで育まれた親せきの
ような関係は、いままも
続いている。

震災を経て新たな役割も

2011年3月の東日
本大震災では、大竹さん
は自分の会社の屋上から、
社屋やその周辺に押し寄
せてきた津波を目の当た
りに。業務用設備も自宅
も流失し、避難所生活、
仮設住宅生活を余儀なく
された。およそ半年間休業
していると、それまで注文
を受けていた事業所など
は、その間にほかの同業
者を利用するようになり、
再開時には顧客が大幅に
減ってしまった。

つながりのあったお客
は沿岸部にも多く、被災
した人が大勢いた。常連
客を訪ねて、仮設住宅や
災害公営住宅へ足を運ぶ
ことも多かった。相手か
ら大竹さんの被害や震災
発生時のことを聞かれれ
ば自分の状況などを話し、
相手が自ら被災状況など
について話をすれば、聞

き手に回った。仮設住宅
から災害公営住宅への転
居期には、「ほかの入居者
との関係が形になつてき
たのに、またばらばらに
なるのか」という不安も、
直接耳にしていた。

「難しい話は得意じゃな
いけど、軽い話し相手には
なれるし、前向きに過ごせ
るようにお手伝いしたい」
災害公営住宅を回って

昔からのお客と会ったり、
大竹さんがお客同士をつ
ないでお茶飲みをしても
らうこともあったという。
昔は大手の業者の行き来
の合間に個人宅を訪問す
ることが多かったが、いま
は個人宅への訪問が主で、
その分お茶飲みの時間が
増えたと笑う大竹さん。

「人づきあいが楽しいか
ら、すべてが楽しい。やつ
ていてよかったと、いつも
実感するし、相手も自分も
笑顔が1番」。営業と称し
て訪問しても、お客をただ
のお客と見ずに、1対1
のつながりをたいせつに
する。支援機関ではなく、
店だからこそ、見守り、支
えることのできる地域の
生活もあるようだ。

清

皇學館大学 現代日本社会学部 准教授

大井 智香子 (おおい・ちかこ) さん

日本福祉大学社会学部を卒業後、岐阜県社会福祉協議会、中部
学院大学短期大学部を経て、2017年4月から現職。専門は、地域福祉、
過疎地域の生活支援、ボランティアコーディネートなど。各地で育まれ
てきた先人の智慧から学び、それぞれの風土に根ざした福祉のあり方、
住民によるまちづくりの構築に取り組んでいる。主な著書は『ボランテ
ア論』(共著・みらい)、『地域福祉の今を学ぶ』(共著・ミネルヴァ書房)、
『地域ケアシステム・シリーズ②地域ケアシステムとその変革主体～市民
当事者と地域ケア』(共著・光生館) ほか。



専門家に聞く地域づくりのヒント

あきない 商は顔の見える場づくり・ つながりづくり

見ないふりしてそっと見る「見守り」

今回の舞台は、近隣住民に長年に渡り愛されている「お花屋
さん」「本屋さん」「クリーニング屋さん」である。あえて、店
舗ではなく「お店やさん」と呼びたい。ご登場いただいたお店
やさんでは、店のカウンターが茶飲み話のスポットになってい
たり、生け花教室や読み聞かせを開催したりと、店舗のスペース
を活動やつながりづくりの場として提供している。また、集
配や御用聞き、移動困難な人の送迎など、顧客の生活空間に出
向くサービスを提供している。そして、カウンターや集配先で、
さりげなく、しかし暖かく話しかけている。そこで展開されて
いるのは、“見ないふりしてそっと見る”見守り活動である。

見守り活動は難しい。見守ったり、見守られたりしたこと
のある皆さんならばピンと来るのではないだろうか。見守りは、
ひとつ間違えると「見張り」になってしまう。それは双方に緊
張を伴う息苦しい関係を生じさせる。

3つのお店やさんは、いずれもその“難しさ”を軽やかにク
リアしている。聞かれれば応え、心細そうな人には話しかけ、
急いでいる人やじっくり自分の時間を過ごしたい人にはその
ペースを尊重する。一人ひとりとのつながりをたいせつにする
からこそ生まれる絶妙の距離感である。

損得抜きを関係の大事にすることから見えてくる 世代を超えた「つながり」

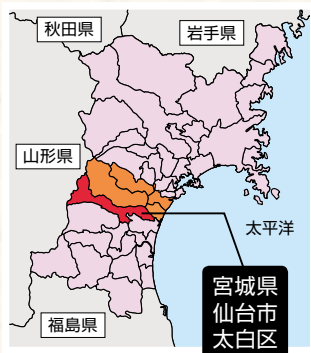
茶飲み話や世間話の相手になること、無料送迎、教室やミニ
コンサートの開催などは儲けにはつながらないように感じられ
るかもしれない。しかし、客の立場から考えるとそういうお店
やさんは安心できる。サービスを押し売りしない、会話のすべ
てが商品の販売につながるわけでもない、でも困ったときには
個人の事情に合わせて対応してくれる。そんなお店やさんだか
らこそ、住民は世代を超えて「地域の、自分たちのお店」と信
頼を寄せ、息の長い商売を可能としている。

商業とは商を業とするものだとすれば、商は人々の「つながり」
や「信頼」「配慮」がなければ成り立たない事業であると言えよ
う。商は「ソーシャルキャピタル(社会関係資本)」そのものど
もいえる。

“無縁社会”とは無縁な地域社会をつくる「地元のお店やさん」

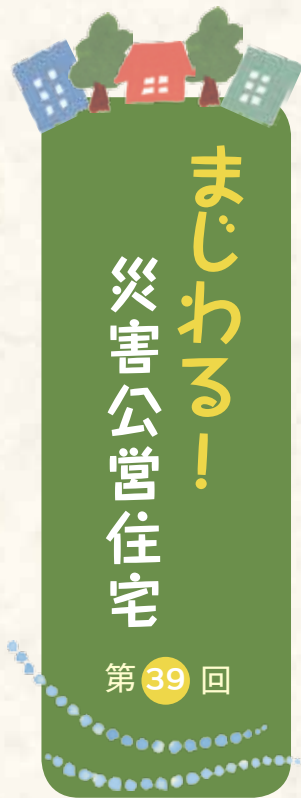
儲けに直結しないかわりを極力省略する生産性至上主義は、
売買の関係を人間関係ではなく、契約関係あるいは交換関係に
単純化する。その結果、自分の足で店舗に行けない人や新しい
決裁システムに適應できない人を“買いもの難民”にする。無
縁社会とは、こうして生み出されているのではないか。

一人ひとりを生活者としてたいせつにすること、それは「地
元のお店やさん」だからこそできるまちづくりである。



住宅内外で力を合わせて

茂庭第2市営住宅めぶき町内会
(宮城県仙台市太白区)



冗談を言ったり、笑い合いながら体操

宮城県仙台市太白区内で一番最後に建てられた災害公営住宅、茂庭第2市営住宅では、入居者の自治会である「茂庭第2市営住宅めぶき町内会」が、団地内の交流促進に取り組んでいる。毎月1回の定期行事として、お茶飲みや体操をする「オープンカフェ」を開催。いつも20人ほどの入居者と、同区役所や仙台

市社会福祉協議会太白区事務所などの職員が集まる。1時間ほどお茶を飲みながら談笑し、公益財団法人仙台市健康福祉事業団の職員から指導を受けながら体操をする。子ども連れで参加する人もいるし、隣接する看護専門学校の学生たちが、参加してくれたこともあった。

男性入居者も、いつも5人前後が参加し、「集まるといろんな人の顔を見て、『元気だな』と安心できる。住んでいる人同士で名前と顔を一致させられる場所だから、ひとり暮らしの人や、まだ知らない人もとっちらけるとうれしい」と話す。

2016年春に入居開始となった同住宅は、太白区内外から入居者が集まった。さらに、東日本大震災による大きな被害のなかった人も対象に行われた、一般公募によって入居した人がおよそ3割を占めている。

入居開始後、同住宅周辺の地域の連合町内会や民生・児童委員、地区社会福祉協議会の福祉委員などと、住宅入居者で世



閑静な住宅地に建つ茂庭第2市営住宅

話人会を結成。同住宅での生活を落ち着かせ、独自の自治会を設立するための準備を、周辺の住民が協力してくれた。めぶき町内会は17年5月に設立し、会長たちはもともと町内会役員の経験はなかったが、同住宅内外の応援を受けながら、行事の企画・運営などを行ってきた。

2〜3か月分をまとめた誕生日会も開き、誕生月の近い人同士でふれあい、祝い合う。住宅全体への広報も行いが、名前・誕生日・部屋番号などの情報を入居者約50人がめぶき町内会に登録している。また、季節行事として、秋に開いた芋煮会では入居者や関係者約50人が親睦を深め、自主的に二次会をした人

たちもいたようだ。12月にはクリスマス会、1月には新年会も開催する。

役員が、ほかの入居者を訪問して行事の参加を呼びかけた成果もあり、子どもから高齢者まで、幅広い交流が見られる。集会所の本棚に置く子ども向けの本も、実際に子どもと一緒に書店に出向いて購入したという。

めぶき町内会会長の清野秀夫さんは、「それぞれの事情や考え方をたいせつにして、話し合いを重ねながら、皆で明るい生活ができるようにしていきたい」と語る。入居している個人同士のつながりによる、食事のおすそ分けも生まれている同住宅。今後内外の交流と協力をもとに、支え合える住宅として盛りあがりていくだろう。

DATA

茂庭第2市営住宅

(宮城県仙台市太白区茂庭台1-4-1)

鉄筋コンクリート造の4階建て1棟。計100戸。2016年3月に完成し、現在は93世帯が入居。

10年間、毎朝変わらぬ子どもたちを見守り続けて

◎早坂武年さん（宮城県仙台市青葉区）



仙台市青葉区北山地区在住の早坂武年さん（84歳）は、毎朝、北山霊園前の交差点に一人で立ち、登校中の小・中学生の安心・安全を見守っている。仙台市教育委員会荒巻小学校学区「学校ボランティア巡視員」の委嘱状交付を受けて、活動。雨の日も雪の日も、学校がある日は毎日そこに立ち続け、10年間無事故を継続している。

見守り中は、子どもたちに挨拶して、様子が変わりないか気に掛かっています。挨拶をすると、皆きちんと返してくれるのがうれしいですね。元気じゃない子は、見ればわかります。下を向いて歩いている子には、一緒に歩いて会話をするようにしています。もし事件や事故など何かあったときには、すぐに交番・保護者に連絡をとれるように、地域の子ども会の名簿を常に持ち歩き、備えています。

見守りをしながら、私も子どもたちに元気をもらっています。幸せですよ。継続のコツは、がんばりすぎないことだと思います。がんばるとガタがくるから、自然体でやることですね。それに、一人ではできないので、町内会などのチームワークが大事になってきます。もともと、北山トンネルが

2012年に開通する前は、北山霊園前の坂は以上以上に車の行き来が激しい通りでした。通学する子どもが多いのに見守りがないことが心配で、自主的に身守りを始めました。

80歳を過ぎたいまも健康で活躍できる秘訣は、早寝・早起きと身体を動かすこと、それにカラオケと適度に嗜むお酒ですかね。人間の身体には油を入れないとね（笑い）。ただし、日曜の夜には次の日の見守りに備えて、お酒を飲まないようにと決めています。子どもたちには、健康第一で、友だちと元気に挨拶を交わして、勉強や運動にはげみ、思いやり・優しい気持ちをもつて育ててほしいです。未来が明るい希望をもつてほしいですね。子どもは地域の宝ですから、地域で育てていかないと。（談）



見守りに立つ早坂さん（左端）

DATA

アマチュア・マジシャンズ・クラブ大船渡

岩手県大船渡市大船渡町字地ノ森 40-8

代表 岩城恭治

68回目

市民リレー

東北の元気

今回は... 東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

地域の元気と笑顔を生み出す マジックショー

◎アマチュア・マジシャンズ・クラブ大船渡
(岩手県大船渡市)

ライター：元持 幸子



次々と披露されるマジックに盛りあがる会場



得意のマジックを紹介しているAMC大船渡のメンバー



互いに教え合いながら、新しいマジックに磨きをかける

「うまくいっても、いなくても、たくさん拍手で盛りあげてくださいね」とユーモアを交え、マジックショーが始まる。トランプや新聞紙を使った身近な仕掛けのマジックや手の込んだマジックなどが次々と披露され、観客を惹きつけている。蝶ネクタイをつけて、マジックを披露しているのは、岩手県大船渡市を中心に活動をしているマジックの愛好家たち「アマチュア・マジシャンズ・クラブ大船渡（以下、AMC大船渡）」だ。

NPO法人夢ネット大船渡が企画した「社会貢献活動入門講座」のマジック講習がきっかけでメンバーが集まり、2014年にAMC大船渡が結成された。

そこから、大船渡市近隣の応急仮設住宅集会所や放課後児童クラブ、デイサービスセンター、公民館での交流企画など、各地でマジックを披露してきた。AMC大船渡会長の岩城恭治さん（79歳）は、「マジックは、びっくりしたり、笑いがおきたりと、日常のなかにちよつと変わったことがおこります。マジックを見ている方が、あっと驚いて楽しんで

くれると、震災後の心にあるつらさを少しの間忘れられるのではないかと思います」とマジックの力を語る。

現在は、13人のメンバーが各地でマジックを披露している。月1回、新たなアイデアをメンバーで持ち寄り、失敗談も共有して、マジックショー本番へ向けた練習会を行っている。年に数回は、プロマジシャンを講師に迎え、新しいマジックの仕掛けづくりや見せ方、トークの仕方などを教わり、楽しみながら練習に励んでいる。「披露したとき、拍手をもらうことが、とてもうれしい」とメンバー最高齢の菊池長さん（85歳）は、新たなマジックの練習に積極的に取り組む。「芸は身を助ける」というように、何か得意なものがあれば、地域でのつきあいや交流がうまくいくようになり、外出する機会も増え、健康づくりや生きがいづくりにもなっています」と、岩城さん。

AMC大船渡は新たなメンバーも随時募集している。

地域に笑いと元気を生み出すAMC大船渡のマジックは、これからも多くの人を魅了していくことだろう。



お困り高齢者お手伝い隊のごみ出し

できるときに、できることを、

できる人がやる仕組み

倉敷市の東部に位置する粒江地区は、源平合戦の激戦地として史跡が残る、のどかな田園地帯だ。地域の課題に住民主体で取り組んできた地区として知られ、一人暮らし高齢者が150世帯を超えたことから、2018年1月に「お困り高齢者お手伝い隊」の活動を始めた。住民のなかから支援者となる隊員を募り、ごみ出しや庭の草取りなど、暮らしの小さな困りごとをお手伝いする。

受付窓口は、地元の社会福祉法人が運営する「倉敷南高齢者支援センター（地域包括支援センター）」が担い、利用申し込み宅へセンター職員と民生委員が訪問して生活状況をお聞きしたうえで、活動できる隊員を調整派遣する。お手伝い後、

利用者が隊員に利用料を支払い、全額が隊員の報酬となる。利用料は、ごみ出しや玄関まわりの掃き掃除、米の精米が1回100円、家のまわりの草取りが1時間500円。実績はまだ10数件と少ないが、毎週ごみ出しのお手伝いをしているケースもある。

「住み慣れた粒江で、高齢になっても安心して生活できる」「住民同士のつながりができる」という目標とともに、担い手として「特に定年退職後の活躍の場」になることも一つの目標としている。

活動の中心を担うのは、粒江地区社会福祉協議会だ。関係機関と策定した小地域福祉活動計画や、定期的に行う小地域ケア会議をとおして、夏祭りなどの交流行事

をはじめ、自主防災組織づくりや、子どもの見守り活動、高齢者だけでなく乳幼児と母親を含むサロン活動の拡大、三世交代交流クッキングなど、幅広く取り組んできた。また、地元の社会福祉法人の支援により、民生委員所有の民家にスロープや給茶機などを設置した地域交流スペース「うきうき館」が昨年開設された。多世代の男性が集う「ちよい悪おやじクラブ」や、住民組織の作戦会議の場として利用され、認知症カフェも開かれるなど、地域の活動拠点として定着しつつある。なかでも「ちよい悪おやじクラブ」は、地元のちよい悪なおやじたちが飲みながら「ちよつといことをしよう」と語り合う会で、実際に赤ちゃんサロンの担い手や「お困り高齢

者お手伝い隊」などの人材発掘の場にもなっている。

お手伝い隊の利用対象は、70歳以上の一人暮らし宅に限っているが、今後は高齢者世帯への拡大やお手伝いのメニューを増やす方向で検討している。粒江地区社協会長の田中孝一さんは、「住み慣れた粒江で、できるときに、できることを、できる人がやる仕組みができた。さまざま活動を組み合わせて、自分の力を地域のために発揮する機会も意識していきたい」と話す。 **小**

●DATA

お困り高齢者お手伝い隊

倉敷市粒江地区で、ごみ出しや庭の草取りなど、暮らしの手伝いする隊員13人。粒江地区の人口は約7千人、高齢化率は29%。最近宅地開発が進み、人口が増加傾向にある。



三世交代交流クッキング



お手伝い隊検討会



「ちよい悪おやじクラブ」の忘年会

どろろでもサロン

第17回

自然なつながりと支え合いを生み出す



畑が男の集いの場

福島県福島市飯坂町

「ただ家にいたつてもおもしろくない。認知症になってしまふ。だから畑を始めた」

こう語るのは渡辺章^①さん（78歳）。福島市飯坂町で建具業を営んでいたが、高齢を理由に70歳で引退した。その際、同町平野地区に150坪の農地を確保、自家用の野菜づくりに取り組んだ。6人家族でも消費しきれないほど収穫がある。「隣近所におすそ分けするほうが多い。とても喜ばれるよ」と渡辺さん。

農業の経験がなかった渡辺さんに、畑の仲間が農作業のイロハを教えてくれる。

仲間は、渡辺さんを含めて5人。このうち元農家の紺野藤^②さん（84歳）と佐藤義雄^③さん（85歳）が、「畑の先生」役を務めている。残りの2人、紺野勝美^④さん（79歳）と紺野文夫^⑤さん（75歳）も渡辺さんと同じく、本業引退後に畑を始めた。それぞれ元はバスの運転手、旅館の調理師。

天気がよければ畑に出る。冬でも雪をかいてダイコンの収穫などをする。

仲間と会えば、路肩に腰掛けて休み。畑仕事の情報交換をしたり、世間話に興じたり。散歩

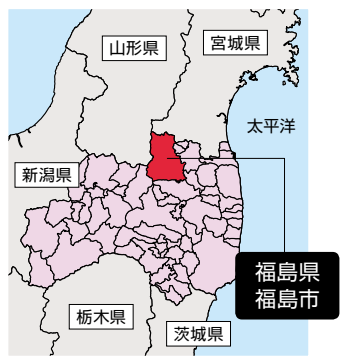
で通りかかる人も立ち止まり、しばし会話に加わる。近くの家の奥さんが、菓子や飲みものを差し入れてくれることも。畑と路肩が交流サロンだ。「もう5、6年続いている」（渡辺さん）。

5人のなかで最高齢の佐藤さんは、「畑がオレの元気の秘けつ。野菜が育つのを見るのも、仲間が集まるのもうれしい」と話す。3年ほど前、大病を患った。医師から在宅復帰は難しいと告げられたが、家に戻り、農作業を続ける強い意志を示し、実現させた。

仲間たちは佐藤さんに野菜づくりのコツを教わる一方、何気なく見守り、体調をおもんばかつて、時に畑の重労働を手伝う。

同地区を担当する飯坂南地域包括支援センターの職員は、「サービスの提供だけが介護予防ではない。佐藤さんにとっては畑が最高のリハビリと介護予防の場」と認める。こうした考えを佐藤さんの家族や仲間とも共有し、ともに佐藤さんの在宅生活と畑仕事をあと押ししている。

この職員、実は地域支え合い推進員^⑥でもある。5人の畑に出向き、自ら泥だらけになって草むしりや収穫を体験しつつ、畑仕



事の様子取材。センターの機関紙で、地域の「素敵な宝物」として紹介した。

野菜ばかりか健康や支え合いも育む畑と、そこに集う仲間たちは、まさしく地域の宝と言えろ。**木**

①「生活支援コーディネーター」とも。高齢でも暮らしやすい地域づくりを住民主体で進めるためのさまざまな支援を行う。

みなし仮設住宅入居者などのつながりを支援

日本海に面する新潟県糸魚川市では、2016年12月22日午前10時20分頃に糸魚川駅近くの商店街で火災が発生し、翌日の午後4時30分まで消火活動が続いた。「糸魚川市駅北大火」と名づけられ、乾燥した強風によって被害が大きくなったことから、風害とみなされた。その被災地域の復興に向けた取り組みについて話を伺った。

糸魚川市では、糸魚川市

駅北大火のあと、自宅などを焼失した住民の7割ほどが同じ地域での再建を予定し、それまでの一時的な住まいとして、公営住宅や民間の賃貸住宅を活用したみなし仮設住宅が用意された。高齢者世帯が多く、最大時には58戸119人が入居した。

大火直後、同市健康増進課や同市社会福祉協議



皆でつくって食べる、料理教室

会職員などが被災者およ

そ100世帯を戸別訪問し、健康状態や生活の様子を確認。同市社協では、2017年7月から生活支援相談員を2人配置し、個別の見守りや交流の支援に一層力を入れてきた。被災地域から離れて生活している人の相談対応などをし、必要に応じてほかの支援機関につなぐことで、課題解消のために寄り添う。同市福祉事務所とおして、保健師なども情報共有を図っている。

「まずは顔を覚えてもらうことに努めた。そうではないと、悩みを聞かせてもらえないし、訪問を重ねるうちに、笑顔を見せられるようになった」

と話すのは、生活支援相談員の加藤亜祐美さん。

青年会議所などと協力して、地域の区長や被災者30人程度で温泉へ出かけたり、高齢で食事づくりやに苦労しているという声を聞いて、料理教室を開催したり、もともと地元でサロンの体操を指導してくれていた人を招いて、ストレッチやお茶飲みをしたり、住民同士が交流・情報交換する機会を設けてきた。被災地域での行事の運営にも協力し、住民間のつながりの維持・強化に努める。

市は、被災者の生活や再建予定に関する調査に基づき、18世帯が入居する復興市営住宅を被災地域内に建設中。まちなみになじむ、木材を基調とした木造準耐火建築で、19年春から入居開始となる。入居者や周辺の地域住民のための交流スペー

スおよび訪問医療診療所を併設する。

復興市営住宅の入居が開始される19年春に、生活支援相談員による定期訪問も終了する。同市社協事務局次長の渋谷千加子さんは、「被災者として支えられるのではなく、各地域の住民として支え合って生活してもらいたい。いまはその移行期間として、地域の輪に溶け込んでいくことを目標につながりづくりなどを支援している」と語る。その後は、同市社協にとっても平時の地域支援の一環として、大火を経験した人たちの生活をサポートすることになる。

同大火が発生したのは、住民のおよそ半数を高齢者が占める地域だったが、人的被害は、負傷者17人（消防団員含む）、死者0人だった。火災発生時に住

民同士が声をかけ合ったことで、避難が完了できたからだという。時間をかけて自然に紡がれてきたつながりを、災害後も絶やさず守っていくことが改めて求められている。清



左から、糸魚川市復興推進課主査の宮路世利奈さん、糸魚川市社会福祉協議会事務局次長の渋谷千加子さん、市社協生活支援相談員の加藤亜祐美さん、復興まちづくり情報センターの矢島好美さん

DATA

新潟県糸魚川市産業部復興推進課
TEL 025-552-1511

糸魚川市社会福祉協議会
〒941-0058

新潟県糸魚川市寺町4丁目3番1号
TEL 025-552-7700

糸魚川市駅北大火復興情報サイト
HOPE 糸魚川
<https://hope-itoigawa.jp/>

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

老いたワーカーからの遺言(年末編)

人の話をよく聴く。自分勝手な想いを押し付けない。幼少の頃から今日まで、親をはじめとして、学校の先生、職場の上司、同僚たちなど、なんと多くの人から言われてきたことか。

懲りずに繰り返してきた気がします。周りの人も呆れて、話半分で聞き流されている（このことに敏感なようで）けど、人の話を聴くことからスタートのワーカーとして、考えさせられる事柄がありました。

11月、雪の函館市であった日弁連の高齢者・障がい者の権利擁護の集い。法に触れた障がい者への、いわゆる入口支援で活躍されている社会福祉士の講演が強く印象に残りました。

しっかりとしたロジックで、まるで弁護士が社会福祉士になっているような、スーパーソーシャルワーカーでした。刑罰を問うのではなく、当事者に必要なのは福祉的枠組みで支援を受けて更生していくこと、その実践を更生支援計画の作成を通じ、福祉系の支援者のネットワークを構築して実証している報告。すごいなアツと想いつつ、すごく気になったことがあった。罪を犯したとはいえ、本人の意思が更生に向けて自律的に形成(醸成)して、表現していく過程が重要に想えるのだが、そこが見えなくて、支援者として「本人の最善の利益」を付度しているようでした。本人の意思など刑罰を受けるにあたっては必要ないのか、よく解りません。しかし、福祉的な枠組みでの更生であれば、本人とともに築くこと、意思決定支援の視点が欠かせません。

してみると、福祉的なケアマネジメント、支援計画については、自律性ということが極めて重要だと気づくと思います。しかし、介護保険等の利用にあって、本人の意思決定に基づくという前提は崩れています。いまさら、という福祉関係者がいたら、『喝』でも『ポーッと生きてんじゃねえよ』と指摘しておきます。来年も続く遺言(?)は、意思決定支援についての話が多くなります。利用者主体、本人主体というけれど、福祉系は支援者の都合を最優先しています。自省を込めて伝えたい。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



生きるうえで心の拠りどころを どこにもっていけば?

今年10月と11月に開催された東北学院大学の「CSW公開研究会『災害公営住宅自治会等活動報告会』と『地域コーディネーターが走る!』」のなかで各地のすばらしい活動実践報告があった。そのなかで特に私が注目したのは、栗原市社協の「若柳支部」と「滝の原地区社協」「根岸地区社協」の活動であった。それは活動の中身もさることながら、宮城県ではあまり耳にしない「支部社協・地区社協」のことである。なぜこのことに注目したかということ、実は宮城県沿岸部の社協においては、仙台市と気仙沼市を除いてほとんど聞いたことのない、小地域での住民主体の福祉推進組織であったからである。宮城では、昔から地縁関係が強く住民同士が顔なじみで、困った時にはお互いに支え合う習慣があったとのこと。そのため、改めて社協が「小地域で住民主体の福祉組織をつくって推進する必要がなかった」と、関係者から何度も聞かされた。確かに、そうした地域の人間関係・風土は「大きな地域福祉の含み財産」だと言える。その後、東日本大震災が起り、被災地においてはコミュニティが崩壊し、「含み財産」も心もとなくなった。そのため、集団移転地や災害公営住宅では、改めて人と人とのつながりづくりや困った時にはお互いに支え合う「福祉コミュニティづくり」の必要性が言われている。

栗原市社協では、10年ほど前から合併前の旧町村単位に支部社協を、そして行政区ごとに地区社協を設置し、サロンや住民同士のつながりづくりなどの活動推進を図ってきたと聞く。地域福祉活動を本当に進めるためには、幅広い住民の参加と住民主体のためまい活動がたいせつとなる。それを実現していくために最も有効な手段の一つは、小地域の福祉組織をつくり、育てていくことであると思う。

地域で新たな住民組織化のイメージが持ちにくいなかで、しかも内陸の過疎化が進む厳しい環境の栗原市において、住民参加・住民主体の地域福祉活動を推進する基盤となる「支部社協・地区社協」を組織化し、小地域福祉活動をたいせつに育ててきた栗原市社協の熱い想いと実践から学ぶことは、大いにあるのではないだろうか。

平成30年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<地域支え合いの発見の仕方 ~かくれた資源を見つけ出せ~>

【気仙沼会場】12月25日(火) 宮城県気仙沼合同庁舎

講師: 池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター)

地域支え合い推進プロジェクト 開発主査)

<地域支え合いの伝え方 ~見つけた資源を伝えよう~>

【気仙沼会場】1月15日(火) 宮城県気仙沼合同庁舎

講師: 池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

田村 洋介(全国コミュニティライフサポートセンター)

地域支え合い推進プロジェクト 開発主査)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



平塚さん自宅での練習風景。左端が平塚祥子さん

69回目

市民リレー

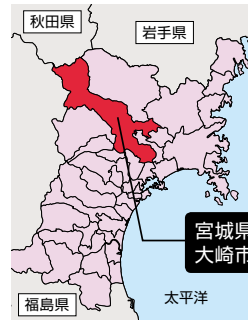
東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

音楽の力を伝えて20年 大崎市のボランティアグループ

音楽ボランティアグループ「やさしい畑」(宮城県大崎市)



大崎市の音楽ボランティアグループ「やさしい畑」は、市内外の公民館や小中学校、老人ホーム、認知症カフェ、イベントなどで演奏をしている。大正琴を中心に、場面や世代にあわせて、ハンドベルやピアノ、オカリナなども披露。音楽の力で老若男女に笑顔をお届け続けて、今年で結成20年目を迎えた。参加者は、「聴いている人もニコニコして、一緒に手拍子をして歌ってくれる。そういうとき、ああ良かったなあって。音楽の力ですごいなあって感じます」とやりがいを感じている。

グループは、平塚雅雄さん夫婦が主宰する大正琴教室の仲間で、「どこかで演奏の機会をもちたい」と結成された。現在のメンバーは7人。グループ名には、「土から生える野菜は大きかったり、長かったり、細かったりするようになり、演奏する人の個性を大事にしたい」という願いを込めた。依頼を受けて、月に1〜2回程度、各地で演奏する。それに向け、月2回は、平塚さん夫婦の指導のもと、合奏練習を重ねる。

「ちゃんとお互いの音、聴こえましたか？相手があって自分があるって、自分があるって相手があつて。自分しか見えていないとタイミングがあわないでしまう」と平塚祥子さん。「がんばります」と返事するメンバーは、真剣ながらもどこか楽しそう。「大正琴の魅力にふれている」「演奏があつたときが楽しい」と醍醐味を味わっているのだ。20年続けられたのも、「気負わないこと。どんなに難しいことをやるのでなく、皆で楽しくやれば」(平塚雅雄さん)と自然体で楽しむことを忘れないからだ。

DATA

音楽ボランティアグループ 「やさしい畑」

〒989-6143

宮城県大崎市古川中里5-5-41

TEL 0229-24-2963

FAX 0229-24-2963

練習の合間には昼食をとみにし、会話に花が咲く。「この近くも高齢者施設が多くなりましたね」「でも、自分のうちで暮らすのが一番幸せって言うね」「施設に入るにしても、手続きをどうやればいいかわからない」「民生・児童委員さんに聞くといいよ。そこからケアマネジャーさんに広げてもらえばいい」と、参加者同士で情報交換の場になつてもいる。



☆次号予告 特集「自治活動」

平成30年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<有償サービスの立ち上げと運営の方法>

【仙台会場】12月20日(木) 宮城県自治会館

講師:吉田 瑞穂(大分県 中津市社会福祉協議会 地域福祉課 課長)

高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

<地域福祉コーディネーター基礎・実践研修>

【仙台会場②】1月17日(木)~18日(金) 仙都會館

講師:藤井 博志(関西学院大学 人間福祉学部 教授)

井岡 仁志(LCALISM LAB.)

<地域支え合い活動実践研修1②岡山県倉敷市編>

【仙台会場】1月16日(水) エスポールみやぎ

講師:小野 史恵(岡山県 倉敷市 健康福祉部健康長寿課

地域包括ケア推進室 課長主幹兼室長)

松岡 武司(岡山県 倉敷市社会福祉協議会 地域福祉課

主任兼生活支援コーディネーター)

田中 孝一(粒江地区社会福祉協議会 会長)

大坂 純(東北子ども福祉専門学院 副学院長)

折腹 実己子(仙台市地域包括支援センター連絡協議会 会長)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

●地域支え合い情報75号の取材先の方から、こんなメッセージをいただきました。このたびは、掲載紙「月刊地域支え合い情報」をありがとうございました。お茶会の参加者の方々に配布しましたところ、たいへんよろこんでいただきました。次の民生・児童委員の地区定例会議でも記事の説明をしようかと思っています。今後ともよろしく願っています。(宮城県名取市 H-U)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

取材したおいかわ生花さんは素敵なお家族で経営されていて、心がほっこり温かくなりました。掲載した以外でもお客さんとの心温まるエピソード・楽しいエピソードもたくさん教えていただきました。紙面の関係上、すべてをご紹介できないのが残念です。近くまでお立ち寄りの際は、ぜひ直接訪ねてみてください。歓迎して、いろいろなお話もお聞かせくださると思います。(田中)